

## 曖昧さと正直さと

—Faulknerの『熊』と『デルタの秋』—

丸 田 明 生

はじめに

高橋正雄氏は *Go Down, Moses* について次のように述べている<sup>1)</sup>。

*Go Down, Moses* は二つの中篇と五つの短篇を集めた中短篇集だがこのうち“Old People,” “The Bear,” “Delta Autumn,” の三篇は, Isaac McCaslinを主人公とする物語の序篇, 本篇, 後日篇ともいうべきものである。ところでこの三篇からなる Isaac の物語の中で, Faulkner は原始主義という一思想を打ち出している。Isaac は幼い頃から狩猟を好み, それを通して野生に心惹かれ, また土地私有の観念のなかつた

Indian の原始生活にあこがれを持つようになる。そしていよいよ21才になつて、祖父からゆずられた土地を渡される時となると、彼はそれを受けることを断乎として拒むのだ。彼は自分達の祖先の犯した土地私有と奴隷制度の罪をあがなうた一つの道は、すべての財産をすてて、天然自然の生活にかえることだと考える。そしてたゞ一人町へ出て、大工をやりながら細々とした生活をたて、まるで修道僧のような生活をする。

Faulkner はこれまで、アメリカ南部のいろいろな問題に体当たりでぶつかり、それをきびしく批判し、訴えはしたが、それから明確な結論や解決の道を引き出そうとはしなかつた。その彼が、こゝで初めて一つの

---

(1) テーマと研究「フォークナー」PP. 22-23.

思想を問題解決の道として表面に打ち出している。しかもこゝで打ち出している自然に帰れという原始主義は、積極的に現実の問題を打開するにはあまりにも素朴で、無力なものである。それは一種の現実逃避ともいえる。この主義を信奉し、実践した Isaac 自身、“Delta Aufumn”で描かれているように、現実には一人の黒人女も救うことのできない無力な存在である。そして Isaac をこのように描いている以上、Faulkner 自身、この原始主義が現実逃避以上のものでないことを十分承知しているものと思える。それにもかゝらず、今の Faulkner はたゞ問題に体当たりしていただけるだけではすまされなくなっている。たとえそれが真の問題解決とはならず、単なる回避となろうとも、なんらかの道を示さずにはいられなくなっている、と。

筆者もこれとほぼ同感なので導入として引用させていたが、本論では“*The Bear*”および“*Delta Aufumn*”を中心に、Isaac という主人公の人間像を更に追求してみたい。

## (1)

“*The Bear*”には主要登場人物が4人いる。すなわち Major de Spain, Sam Fathers, Boon Hogganbeck, それに Isaac McCaslin であるが、それに Old Ben を加えるべきかも知れない。こゝでは先づそれぞれの人物と Isaac の関係を考えることにする。

先づ Sam と Isaac との関係から考えてみたい。そのためには Sam Fathers なる人物を一寸紹介しておかねばならない。彼は Chikasaw Indian の酋長 Ikkemotubbe と4分の1黒人 (Quadroon) 奴隷との間に生まれた不義の子であるが、酋長はその黒人女がまだ妊娠中に別の黒人奴隷と結婚させたために Sam が生まれた時は“*Had-Two-Fathers*”と呼ばれていた。彼は生まれて2年後、実父である酋長によって、義父と実母と共に Carothers McCaslin (Isaac の祖父にあたる) というこの地方の大農園主のところへ奴隷として売られたが、Sam は成人するにおよんで名目上はそのころの主人 McCaslin Edmonds (Cass) に仕えるしもべであったが、常に自然を伴侶とした原始的生活を好み、偉大な森の住人

と目されるようになる。そして主人の従弟にあたる Isaac（以下 Ike と呼ぶ）に幼少の頃から獵の仕方を教え、狩獵を通じて精神的な修練をたゝき込んだわけである。Sam は Ike が10才になってはじめて11月に行われる狩獵の一行に加わることを許された時から彼に荒野での修業を仕込みはじめたわけであるが、それから2年後 Ike が12才になった時の狩獵で彼が始めて雄鹿を射止めた時、インディアン流に少年の顔にその鹿の暖かい血を塗って成人式を行ない、一人前の狩人としての門出を祝福している。その描写は次のようである。

They were the white boy, marked for ever, and the old dark man sired on both sides by savage kings, who had marked him, whose bloody hands had merely formally consecrated him to that which, under the man's tutelage, he had already accepted, humbly and joyfully, with abnegation and with pride too; the hands, the touch, the first worthy blood which he had been found at last worthy to draw, joining him and the man for ever, so that the man would continue to live past the boy's seventy years and then eighty years, long after the man himself had entered the earth as chiefs and kings entered it;<sup>2)</sup>..... [118]

こゝには、この儀式によって少年 Ike と Sam の心が永久に結ばれたことが示されているといえよう。その心とは二人の間を堅く結んだ 'primitivism' の糸であるように思われる。

Sam の wilderness への帰依は、さすがに Ike のこの荒野での精神的父親たるにふさわしく、この wilderness に彼の永久の住まいを移しもっていることによっても頷かれる。そして更に血統的にも Boon のように平民 (plebeian) であってはならず、又黒人の血が流れているとはいえ、黒人とも次のように異なっている。

---

(2) William Faulkner; *Go Down, Moses* (Chatto & Windus, 1974) p.118.

以下引用文の末尾の数字は上掲書の頁数をあらわす。

He (Sam Fathers) talked like a nigger.....that is, he said his words like niggers do, but he didn't say the same words.....and his hair was nigger hair. But his skin was quite the color of a light nigger and his nose and his mouth and chin were not nigger nose and mouth and chin.<sup>3)</sup>

そして又 Sam の立居振舞については、

In the boy's eyes at least it was Sam Fathers, the negro, who bore himself not only toward his cousin McCaslin and Major de Spain but toward all white men, with gravity and dignity and without servility or recourse to that impenetrable wall of ready and easy mirth which negroes sustain between themselves and white men, bearing himself toward his cousin McCaslin not only as one man to another but as an older man to a younger. [122]

これらの引用からもお、よそ Sam の輪廓が浮びあがってくると思われるが、自然に帰ることによって身についた文明の垢を浄化しようとする Ike には、数世紀にわたってこの wilderness を「大学」としてきた文明に汚染されないインディアンの子孫であると同時に、酋長の子孫でもあり、酋長の未裔たるにふさわしい Samこそ、Ike の mentor として価値ある老人であったのである。

(2)

こゝで、何故それでは Ike は森の中に入らねばならなかったか、という問題について少し考えてみたい。Lewis P. Simpson は、「Ike McCaslin and the Second Fall of Man」という論文の冒頭で、「フォークナーは、アメリカ南部文化の歴史は現在西洋文明の危機の肝要な一部であることを知っていた」(Faulkner knew that the history of American South culture is an integral part of the crisis of modern Western

---

(3) William Faulkner: *These thirteen* (Chatto & Windus 1974) p.108.

civilization) といひ、更に Rousseau の例を持出して、

.....the arts and sciences have done more to corrupt than to aid human beings. Rousseau's attitude prophesied the aftermath of the Enlightenment, indicating that in the very midst of the century which coined the word "civilization" a profound discontent with civilization had begun to arise. From that time until the present the existence of this element of dissatisfaction has been a major characteristic of the literary and artistic expression of Western culture. <sup>4)</sup>

と述べている。

　　いうまでもなく、こういうプロセスの中で、19世紀のイギリスのロマン派の詩人達が生まれたのであろうが、アメリカではそれが“The Great Frontier”に対する讃歌となつてあらわれたものと考えることができよう。その讃歌は、同時にその Frontier が、「あの旧世界の腐敗と無価値な薄暮の中から携えてきたもの」(.....what Grandfather and his kind, his fathers, had brought....., from that old world's corrupt and worthless twilight [184]) によつて急速に消滅することに対する挽歌でもあるのである。“The Bear”に見られるものはまさにそれと言えらう。

　　死すべき運命にありながらも Ike が始めてみた荒野は、薄れていく午後の光と、一年の死滅せんとする気配の下に「薄暗く、底知れず、果てしなく延びている、丈高いうっそうとした11月の森林の壁」(the tall and endless wall of dense November woods under the dissolving afternoon and the year's death, sombre, impenetrable [137]) のようにまだ巨大であり、そしてその中にはこの big woods の主ともいふべき Old Ben —「この上地のなかを、この世のけものでさえもない、いわば、

---

4) Lewis P. Simpson: 'Ike McCaslin and the Second Fall of Man,' compiled in *Bear, Man and God*, p.202.

死滅した大昔から出現した不屈不撓の時代錯誤ともいうべきもの、ちっばけな人間どもが、まるでうたゝねをしている象のくるぶしのまわりに群がった小人のように、嫌悪と恐怖に駆けられるあまりに、群がって切りつけた、いにしへの野性の生活の一つのまぼろし、一つの縮図、そして一つの神格、—— 孤独で、死の運命を赦免された、人間よりも年老いた老熊 — 老妻を奪われ、その息子たちの死んだあとに生きのびた老プリアム<sup>5)</sup> — が馳けぬけているのであった。

この中で使われている「不屈不撓の時代錯誤」とはいうまでもなくこの作品のテーマの一つである ‘primitivism’ を象徴していると思われる。それ故に Ike や Sam が Old Ben と森深く密会しても発砲しえなかったのは当然のことであろう。荒野の司祭ともいうべき Sam はいう。

「おめえは鉄砲を手に持っている時に、二度も奴を見たぞ。今度は撃ちそこなうはずもなかったでねえか」 (“You’ve done see him twice now, with a gun in your hands,” ..... “This time you couldn’t have missed him.” [150])

それに対して Ike は答えている。

「おじいさんだって撃ちそこなうはずもなかったでねえか。おじいさんも鉄砲をもっていたんだ。どうして撃たなかったんだい」 (Neither could you,” ..... “You had the gun. Why didn’t you shoot him?” [150])

これより先 Ike が初めて牡鹿を射とめ、その暖かい生血で印をつけてもらって「荒野」への入門を許されながらどうしても Old Ben に会えないでいる時、「それは鉄砲のせいだぜ」 (It’s the gun. [145]) と Sam

---

5) .....an anachronism indomitable and invincible out of an old dead time, a phantom, epitome and apotheosis of the old wild life which the little puny humans swarmed and hacked at in a fury of abhorrence and fear like pygmies about the ankles of a drowsing elephant;.....the old bear, solitary, indomitable, and alone; widowed childless and absolved of mortality.....old Priam reft of his old wife and outlived all his sons. [136-137]

にいわれて心の中で *The gun. The gun.* とくりかえしながら、しかも Sam の “You will have to choose” [146]. という言葉を思い浄かべながら、彼の将来への方向を決めるのである。こゝで鉄砲を捨て、更に磁石と時計を捨てた時、即ちこれら「文明の汚れ」を払拭した時、始めて Old Ben をみることが出来たのは周知のことである<sup>6)</sup>

その時まで Ike は「既に自分の意志で、自分の要求から、謙譲な平和な気持ちのうちに、しかもなに悔いることもなしに自分を放棄していたのだった」(He had already relinquished, of his will, because of his need,

in humility and piece and without regret [147]) が、この「自己放棄」というのが、多分 Faulkner がこの “The Bear” の中で少なくとも20回は繰返えす *pride and humility* の ‘humility’ の別のよび名でもあろう。それは、白人の傲慢不遜ともいうべき思いあがりへの警鐘ともいうべきものである。Simpson は Stephan Spender の一文を引用して次のようにいう。

In all these theories (theories of modern culture like Eliot’s famous idea of a “dissociation of sensibility”) there is perhaps concealed the idea of a Second Fall of Man in the industrial age. The operative cause of this Second Fall was the concept of individualism [in contrast, Spender apparently means, to the fudal concept of community], which led from the Renaissance onward, to the scientific era. Knowledge of science and industry here plays the role of eating the tree of knowledge. The Second Fall is considered so much worse than the first one that Original Sin can be looked back on as the sign of man’s comparative innocence, whilst it is precisely the loss of the sense of Original Sin which is the peculiar worse-than-

---

6) この磁石と時計については、Irving Malin: *William Faulkner, An Interpretation* (Stanford Uni. Press) の中で、He is not a white man any longer. Class distinction are lost.....he is merely the hunter out of time (the watch) and space (the compass), と述べている。

damned condition of men in the period of exile which is the Second Fall. For the sense of Original Sin offers man the possibility of redemption whereas the loss of this sense condemns him to a life deprived of all moral significance.<sup>7)</sup>

こゝで述べられていることを一言でいえば、人間がルネッサンスから科学の時代への移行の過程で自己を過信するのあまり、原罪 (Original Sin) の意識を失なってしまった、ということであり、Simptonはそれを「人間の二度目の楽園喪失 (墮落)」といったものと思われる。

このような自然への同一化の志向と再生感とはうらはらに、この 'big bottom' は鋤と斧をもった人間によって刻々とその緑を噛みくだかれていく運命にある。

Part II で、仔馬がやられ、その相手が何物であるかについて General Compson 始め狩猟の一行が話しあっている時、Sam の顔には 'Something' があり、それが予知 (foreknowledge) の色であったことをずっと後になって Ike は悟るのだが、その時のその色というのは「狂気の色でもなく、歓喜の色でもなく、希望の色でもなかった」(It was neither exultation nor joy nor hope. [152]) のである。その「喜び」というのは、その熊がやがて滅びる日も近いことをこの出来事で確かめると共に、彼と自分とのあまりにも似た境遇から、自分も彼の死と全く同時に力を失っていくことへの予知の中に、悟りて死地におもむく者のよろこびともいうべきよろこびがあらわれていたに違いない。

*And he was glad, he told himself. He was old. He had no children, no people, none of his blood anywhere above earth that he would ever meet again. And even if he were to, he could not have touched it, spoken to it, because for seventy years now he had had to be a negro. It was almost over now and he was glad. [152]*

---

7) Lewis P. Simpson: 'Ike McCasin and the Second Fall of Man,' compiled in *Bear, Man and God*, p.206.



Sam は森と熊と運命を共にすることにむしろ喜びさえ感じている。そして70年間の黒人としての一生を閉じることに。そこには又Faulknerの黒人に対する同情の一端をうかがうことができる。

(3)

しかしこゝに実に不思議なことがおこる。あれ程森や自然に溶け込み、名実共に森の住人である Sam が、 Old Ben を追いつめ、やがてその命を断つことの大半を引きうけることにもなる Lion なる猛犬をどこからともなく手に入れそれを育てるのである。あとでは Boon が Lion の面倒をみることが多いが、あくまでも主たる飼育者は Sam なのである。なぜいやすくも Sam がそのように荒野の崩壊に積極的に加担するのであろうか。もしもその老熊が Sam の 'totem animal' とするならば、それを扶殺する意図はもち得ない筈であり、たとえ Old Ben によって「とうもろこし納屋がこわされて荒されたとか、仔豚や親豚や仔牛までがまるごと運びこまれてむさぼり食われ、罾や落とし穴が破壊され、犬がずたずたに裂かれて殺された」(.....corn-cribs broken down and rifled,.....shoats and grown pigs and even calves carried bodily into the woods and devoured and traps and deadfalls overthrown and dogs mangled and slain.....[136]) としても、それは Ike の憎む「文明の汚れた触手」に対する Old Ben の報復に外ならないからであり、Old Ben の視点に立つ時、Sam の態度は実に 'ambiguous' なものになるといわざるをえない。たとえ Old Ben が「時代錯誤」であり、いづれは死すべき運命にあるとしても、彼が Ike に「銃のせいだ」と教え、熊の死と自分の死が共にくることを予知した Sam 程の自然人が、どうして自らの命の故郷<sup>ふるさと</sup>を、その totem animal の死を早めようとするのであろうか。

一つの考え方としては、荒野の滅亡を誰よりも早く、切々と予知していた Sam ならばこそ、早晚滅びねばならないものなら、文明によって滅ぼされる前に荒野は自らの手で滅んでいかねばならぬ、といういわば

Sam の積極的な意志があったという考え方である<sup>8)</sup>。しかしこの考え方を全面的に受け入れることは果して可能であろうか。

Part II の最後にある次の paragraph は上記の点への考察も含めて極めて重要な一節といわねばならない。

So he should have hated and feared Lion. Yet he did not. It seemed to him that there was a fatality in it. It seemed to him that something, he didn't know what, was beginning; had already begun. It was like the last act on a set stage. It was the beginning of the end of something, he didn't know what except that he would not grieve. He would be humble and proud that he had been found worthy to be a part of it too or even just to see it too. [160]

この部分は Ike の荒野および Old Ben に対する態度の解明のために十分分析する必要があるように思われる。

*So he should have hated and feared Lion.* (イタリックス筆者) ……………  
この一文は、第二章の冒頭とこの二章の最後に繰り返されるリフレインであり、それだけ重要な意味をもっていなければならない。そしてその意味は、やがて Old Ben を倒すことになるこの Lion を憎まねばならない、恐れねばならなかった、ということであり、それは荒野の終焉を意味するから、という理由によるものである。それは Ike の母なる大地を永久に失なうことになるからである。しかし彼は「Lion を憎みも恐れもしなかった」のである。それは fatality のような気が彼にははしたし、その必然的に起る事態を「悲しまずに受け入れる」ことができたし、むしろ「謙る」と同時に、「誇り」をもって、その something — これは当然老熊の死、荒野の死を意味するが — に加担し、又はそれを「落着いた気持で眺められる」といつているのである。

---

(8) 野島秀勝; 「無垢」からの告発 — 『熊』について。「フォークナ  
一全集 16」(富山房) 460—461頁。

こゝには既に Part I にみられるばかりでなく磁石と時計を捨てた 'humility' は姿を消そうとしている。それにかわって 'pride' が次第に頭をもたげ始めているといえるだろう。彼がかつて老熊に感じたあの連帯感はないのではなからうか。「それは全く懐しいものであった。やがて彼は思い出した — これこそ自分がいつも夢みた姿なのだ、と」 (It was quite familiar, until he remembered: this was the way he had used to dream about it. [149-150]) におけるあの老熊に対する愛着とロマンは……………。

(4)

こゝで Faulkner のいう 'pride' とは何か、について考えてみたい。Part IV には Sam のことが次のように記されているところがある。彼は「黒人奴隷とインディアンの酋長の息子であるが、一方で（母方から）苦難を通して謙虚さを学び、苦難を生きのびる忍耐を通して誇りを知った民族の連綿たる歴史の継承者」(……son of a Negro slave and an Indian king, inheritor on the other hand of the long chronicle of a people who had learned humility through suffering and learned pride through the endurance which survived the suffering [211]) であると。即ち 'pride' は「苦悩を生きのびる忍耐を通して知る」ものであると

Faulkner は考えているようである。しからばその視点に立って「誇り」を会得していく Ike の過程はどのようなものであったか。

Sam がインディアンの酋長の息子として恥じない 'pride' を身につけていたことについてはさきに引用したけれども、彼が追跡する Old Ben も丁度 Hemingway の主人公達がライオンの中に、又 Marlin の中に感じたあの威厳をもち、Ike に見習う気を起させる 'something great' である。

Dozing, swaying as the springless caboose lurched and clattered, he would hear them still talking, about the shoats and calves Old Ben had killed and the cribs he had rifled and the traps and deadfalls he had wrecked and the lead he probably carried under his hide……Old Ben,

the two-toed bear in a land where bears with trap-ruined feet had been called Two-Toe or Three-Toe or Cripple-Foot for fifty years, only Old Ben was an extra bear (the head bear, General Compson called him) and so had earned a name such as a human man could have worn and not been sorry. [163-164]

この Old Ben の描写には明らかに「苦悩を生きのびる忍耐を通して知った誇り」があるが、同時に殺戮が肯定され、強者崇拜の思考もその裏側にひそんでいるようにも思われる。

Lion も又 Ike の師であるといつてよからう。そしてそれは Old Ben 以上に又殺戮者なのである。「ライオンは、勇気と、追跡し殺そうとする意志と欲望を作りあげる一切のものを暗示しているばかりか、忍耐を — 追いついて殺すためにはありとあらゆる肉体の限界を越えて耐えようとするあの意志と欲望を — 暗示している」(.....Lion inferred not only courage and all else that went to make up the will and desire to pursue and kill, but endurance, the will and desire to endure beyond all imaginable limits of fresh in order to overtake and slay, [169]) のである。こゝには 'kill' と 'slay' が、'will' と 'desire' と結びついて二度あらわれていることに注目しなければならない。Lion を憎み恐れなかった Ike の学びとっていくプライドというのは、Lion が最後にしめすあの相手の喉に食いついてはなさない、あの殺し屋の別名なのであろうか。

Ike は又 Boon から学ぶ。Boon は、

.....the quarter Indian, grandson of a Chickasaw squaw, who on occasion resented with his hard and furious fists the intimation of one single drop of alien blood and on others, usually after whisky, affirmed with the same fists and the same fury that his father had been the full-blood Chickasaw and even a chief and that even his mother had been only half white. He was four inches over six feet; he had the mind of a child, the heart of a horse, and little hard shoe-button eyes without depth or meanness or generosity or viciousness or gentleness or anything else, in the ugliest face the boy had ever seen, [161]

であった。この Boon の描写は、我々に彼が先づ何よりもインディアンのチカソー族の子孫であること、即ち文明を携えてきた白人でないことを強調すると同時に、知能は低いけれども、容貌は醜いけれども、その反面、いやそれ故に、文明の所産である ‘depth, meanness, generosity,

viciousness, gentleness’ と人間のつくりだした美德、悪徳のいかなるものも持たない、全くの自然児であることを印象づけている。彼は知能が低い。それ故に Ike に Sam のような方法で教えることはできない。しかし彼の行動そのものが何にもまさる Ike への教訓ともなっている。

その一つは、Ike がまだ10才の時のことであるが、McCaslin を説き伏せて、Boon と共同で競売で買った野性の、一度も馬勒をつけたことのないテキサス産の白黒斑の仔馬に、Boon が大丈夫だというので二輪馬車を引かせようとした時、その仔馬が大あばれして上に乗っていた

Ike はその瞬間 Boon が身をとって襟首をつかんで道端の溝に投げこんでくれなかったら、とついに冥土へ行っていたらと思われる事件があったこと。— それを思い出して Ike は、Memphis で Boon のウィスキー代に1ドルくれてやるのだが —。そして今一つはいうまでもなく腹をひっか、れ始めた Lion を見かねて Old Ben に走り寄り、馬乗りになってナイフで止めをさすあのこの作品の一つのクライマックスをつくりだす勇気である。そして Old Ben を仕止めた後も、我が身をかえりみず Lion や Sam のために犠牲的につくす Boon の勇気である。

Ike はこの勇気を ‘emulate’ しようとする。そして彼と共に河を渡って Old Ben を追いつめる。Ike の手には銃がにぎられている。しかし Ike はこゝでは、銃を持っていながら撃つことができない Ike ではない。Old Ben を追う Boon のすぐうしろにくっついていく若い獵犬をみて、「多分あれが勇気というものだろう」(Maybe that’s what courage is.

[170]) と彼は思う。又 Ike は20年前フォレストの指揮下にあるサートリス大佐の騎兵隊の一員として北軍の兵士達の中に馬を乗り入れた彼の父の勇気やプライドについても思いを馳せる。

しかし我々はまだはっきりと明確な形で Ike の勇気や誇りや謙虚さを

つかみ得ていない。なる程 General Compson は Old Ben を追う最後の機会に、Ike に Katie という名驃馬にのせるよう、「彼にはまだこれからずっと先長い間熊狩りをするチャンスがあるから誰か外の者を」(“Ike’s got the vest of his life to hunt bears in. Let somebody else.....”

[168]) という McCaslin を制して、「わしはアイクにケイティに乗ってもらいたいんじや。あの子は、もうすっかり、おまえやわしよりも立派な森の人間になっておるし…」(“I want Ike to ride katie. He’s already a better woodsman than you or me either.....” [168]) といつて彼の修業の成果を認める発言をしているし、又 Old Ben を倒した日に森に残りたいという Ike に味方して、

“You’ve got one foot straddled into a farm and the other foot straddled into a bank; you aint even got a good-hold where this boy was already an old man long before you damned Sartoris and Edmondses invented farms and banks to keep youeselves from having to find out what this boy was born knowing.....”[178]

と Ike の生まれながらの資質を認めてもいる。しかし Faulkner がこゝで読者を納得させようと試みているにせよいかにせよ、Ike はまだ Ishmael であり、Boon が Ahab である、という David H. Stewart の意見にある程度共感させざるを得ない<sup>9)</sup>。結局それは Ike が onlooker にとゞまらざるをえなかったことを意味し、そのことは所詮彼の目指す位置に、それを如何に望まうと、この時点では少くとも到達できなかったことを意味するであろう。それは Part IV における土地の相続の放棄や、Part V の最後の場面での Boon に対する態度、更には“Delta Autumnan”

9) Twice he (Ike) had the opportunity (to shoot Old Ben) but, like his mentor (Sam), declined it despite this eminent worthiness. For him desicive action in difficult; and he waits until the plebeian, Boon Hogganbeck, who is as much animal as man (Faulkner’s plebeian often are), commits the final deed and thus absolves Ike of responsibility so that he can assist with *pure hands* at Sam Father’s funeral. (italics added) .....Stewart: ‘Ike McCaslin, Cop-Out,’ compiled in *Bear, Man and God*, p.214.

での Ike の身内である octoroon に対する態度にも尾を引くことになろうが、それらの点について少し考えてみたい。その相続放棄について更に Stewart は、

What he does is simple: after all the talk and theorizing, he gives all of his property to his cousin, fastidiously and successfully evading the entire problem of social position and power. He remains inviolable and pure.....and is on two occasions judged rather severely for it: Faulkner,....., says that “old Isaac.....in a sense, say what a man would, had turned apostate to his name and lineage by weakly relinquishing the land which was rightfully his.....” Later on, when Ike is an old man, the colored girl, remotely his kin and *pregnant*<sup>10)</sup> with Roth Edmonds’ child, tells him that she should have made a man of Roth, but Isaac had spoiled him before birth by transferring the McCaslin land to the Edmonds family, hence weaking or emasculating them just to save himself.<sup>11)</sup>

とって、土地所有権を放棄することは弱々しい行為であり、家系への背信であるという Faulkner 自身の言葉も引用している。

(5)

Ike の荒野での修業が、イニシエーションの儀式であり、彼の大人 (man) への成長を志向していたことには異論はないであろう。その過程で先にみてきたように主として Sam, Boon, Old Ben, Lion に彼は Roth の女のいう「男になる」手ほどきを受け、Old Ben という彼の前に立ちだかる巨大な壁に挑戦したことは事実であろう。だがその壁が、彼のこよなく愛し、止むをえないことだとは知りつゝもその滅亡を悼む荒野の主であり、象徴であることには、すべてのこと、即ち荒野が死す

---

(10) これは Stewart の記憶違いであろう。この女は Roth の子供を既に腕に抱いているのであって、妊娠中ではない。なおイタリックは筆者。

(11) Stewart: “Ike McCaslin, Cop-Out;”, compiled in *Bear, Man, and God*, pp.215-216.

べき運命にあるとの Ike および Faulkner の認識, Faulkner 自身が極めて猟を愛していたこと, そして Old Ben が単なる象徴としての壁であり, そして又この作品がアメリカの小説の一特質である象徴的色彩の強いものであるという諸点を認めた上でもなお 'ambiguous' なものを感じる。しかし, とも角この狩の物語は, やはりアメリカにおける先祖伝来のフロンティアの物語であり, 男の世界のフロンティアとの対決というビルディング・ロマンであるということになるであろう。いさゝか Ike はかつてのヒーロー達に較べて衰弱してみえることは歪めないけれども, それは対決するフロンティアが, 嘗てのフロンティアとは別のフロンティアが, あまりに巨大で個人の手には負えないものになっているといえるであろうけれども。

## (6)

Part IVでの土地相続放棄は, いわゆる Ike のイニシエーションの産物ということに一応はなるであろう。この『熊』の物語でのイニシエーションが直接的に相続拒否に結びつくことには唐突の感がしなくもない。しかし Faulkner がこの *Go Down, Moses* の他のストーリーを始め, これまでの作品に描いてきた世界を全体的にとりあげる時, それは「光をあてること」から「問題解決」への第一歩として肯定はできよう。しかしたゞあの『熊』との物語だけでは Ike には行動エネルギーが不足している気がする。認識エネルギーは充分としても。そのギャップは“Delta Autumn”に鮮明にあらわれていることは先に言及した通りである。何故ならその行動エネルギーは Faulkner にとってはまだ新しいジャンルであったからであり, 如何によき師を得たとしても完全に自分のものとはなり得なかったともいえるであろう。たゞくりかえしていえば Ike の認識は殆んど完全であったといってもよい。それは彼が苦難の末に自信をもって到達した結論でもあったわけであり, それは次の言葉で証明されている。



He made the earth first and peopled it with dumb creatures, and then He created man to be His overseer on the earth and to hold suzerainty over the earth and the animals on it in His name, not to hold for himself and his descendants inviolable title for ever, generation after generation, to the oblongs and squares of the earth, but to hold the earth mutual and intact in the communal anonymity of brotherhood, and all the fee He asked was pity and humility and sufferance and endurance and the seat of his face for bread. [183]

しかしこの悟りによってもたらされた相続放棄という行為は、たとえば「出家」であり、「世を捨てること」にも匹敵するものであろう。何故なら何らかの形で社会への働きかけをしない限り次第に世の片隅に埋もれていく運命を辿らねばならないからである。それは決して『キリスト』の姿にはまだ程遠しの感がある。Ikeは同じ放棄をするにしても Edmonds 家へではなく、黒人の共同農場にでもしていたらどうだったであろうか。

Olga W. Vickey は Ike のこの行為を

.....Isaac's withdrawal is in reality an attempt to evade both the guilt of his forefathers and his own responsibilities. Thus, while his daily life is a humble imitation of Christ's it also denies the spirit of Christ who did not hesitate to share in the life of men, to accept guilt, and to suffer immolation.<sup>12)</sup>

といってキリストとの根本的な相違を力説する。そしてその證據として、彼が20才から“Delta Autumn”の80才近くまでの間に何一つ語るに値することをしていないことを指摘する<sup>13)</sup>。然らば一体森での修業は、そこで修得したものは、— Faulkner は修得したと言いたいであろうが — この森の外ではどんな力を発揮したか。なる程彼は土地放棄はした。

---

(12) Olga W. Vickey: 'God's Moral Order and the Problem of Ike's Redemption,' compiled in *Bear, Man and God*, p.211.

(13) The measure of this lies in the fact that nothing happens to him (Ike) between his twentyfirst and seventieth year.....*ibid.*, p.212.

しかしそれは森の美德とどんな関聯をもつのであろうか。そして実際森の美德は、即ちフロンティアの美德は、Sam にしろ、Boon にしろ、森の中だけの生命<sup>いのち</sup>しか持っていないのではないか。この作品『熊』は、'wilderness' への挽歌であると共に、*Frontier Spirit* への挽歌でもある。そして *Frontier Spirit* への挽歌ということは、個人的 *Frontier Spirit* が現在何をなしうるか、という意味で個人への挽歌にも通じているのではなからうか。それは哀愁を帯び魅惑的ではあるが、孤独の影がつきまとう。

言葉をかえていえば、Ike の求めた 'pride' は、むしろ Ike が拂捨しようとした「あの旧世界の腐敗と無価値な薄暮の中から携えてきたもの」の別名に外ならなかったのではないか。'pride' はキリストにとっては「罪の中の罪、それこそセイトンの罪」(the greatest of sins, the sin of Satan<sup>14</sup>) なのではあるまいか。Ike のイニシエーションは所詮それこそ時代錯誤、'anachronism' ではなかったのだろうか。Ike の認識を行動に駆立て、みならせるエネルギーはこのような方法では創り出されないのではなからうか。

Old Ben や Sam の死後2年経って Ike が18才の時再び bottom にもどってみると、大森林の伐採権は製材会社に売られており、かつては牡鹿が飛び出して、信じられない程の速度で駈けていた場所にまで鉄道が敷かれ、大森林は日一日と材木工場に侵食されている。Ike はその毒気を避けて懐しい森林に入り、新緑と孤独に取囲まれる。そしていろいろの過去の冥想にふけるのである。

.....he knew now what he had known as soon as he saw Hoke's this morning but not yet thought into words: why Major de Spain had not come back, and that after this time he himself, who had had to see it one time other, would return no more. [229]  
この「二度とは(この bottom)に戻ってこないだろう」ということ

(14) John Lydenberg: 'Native Myth in Faulkner's "The Bear,"' compiled in *Bear, Man and God*, p.166.

が、彼の修業の稔りを否定せざるを得ない第一の證據である。彼は wilderness を見捨てたのである。その意味ではこの『熊』の最後の部分で、リスの群がり駆け廻っている大きな樹木の幹に背をもたせ、打ち割った銃の銃身で銃尾をたゝき毀しながら、そこに近づいてきた Ike を見ようともせず、それ故に Ike とも知らず、「こゝを出て行け。こいつ等に手を触れるんぢゃねえぞ。一匹だつて触れるんぢゃねえぞ！こいつ等は俺のものだ」(“Get out of here! Don’t touch a one of them!

They’re mine!” [236])と呼ぶ Boon の中に、荒野へのより強い愛と、文明へのより強い憎しみのあかしを読みとることができるとすれば、

Ike はやはり文明の世界からきた、文明の汚れを払拭することのできない、問題に体を張って取組めない、責任回避の文明人に過ぎないのである。彼の *humility* と *pride* の ‘phoniness’ もこゝにあらわれているといえるであろう。

人は、Ike の森の修業の成果は一時的にせよ土地相続放棄にあらわれているというかも知れない。なる程その行為そのものを価値のないものだというつもりはない。しかしこの『熊』の主題は、やはり「荒野の消滅」であろう。何故なら Part IV は Part V の後には置かれていないからである。Faulkner は「あの章は novel の一章であつて short story のそれではない。それは出版者が勝手に現在のところに入れたものである」<sup>15)</sup> という主旨のことを述べているが、彼がそれをそのままにしているということは、何よりも彼にとって「荒野」が main theme であり、「土地放棄」が subordinate theme であることを証明しているのではあ

---

(15) Q. Returning to “The Bear,” Mr. Faulkner, why did you put Part V after Part IV?

A. That story was part of a novel....., Take this out, this doesn’t belong in this as a short story. But rather than to go ahead and do that without asking me.....and I wasn’t available at that time.....he printed it as it was. It doesn’t belong with the short story. The way to read that is to skip that when you come to it.....

(Frederick L. Gwynn and Joseph L. Blotner: ‘Faulkner’s Commentary on Go Down, Moses, compiled in *Bear, Man and God*, pp.115–6.

るまいか。

(7)

しばしば触れてきたように“Delta Autumn”は齢80才になんなんとする Ike が登場する。彼は今、かつてかの若かりし、Old Ben を射とめた頃一緒に狩りをした連中の孫たちとこの Delta にやってくるのである。そしてその Delta は、「ジェファソンから30哩にすぎなかったのが、今では200哩になっている」とはいうものゝ、かつての荒野はまだ幾らか残っていた。彼はその荒野が、征服され、破壊されるというのではなくて、むしろ今ではその目的が果され、その時がもはや時代おくれの時となり果てたが故にみづから退いてゆく」(There was some of it (wilderness) left, although now it was two hundred miles from Jefferson conquered, destroyed, so much as retreating since its purpose was swerved now and its time an outmoded time [242]) Deltaなのである。この描写の中には、この50年間に消え果てた森の姿が彷彿し、そしてそれに対する Ike のやや諦観的なトーンが宿っており、それは『熊』における Part V のトーンと共通性をもって描かれている。しかしとに角、こういう設定の中に彼は長老的存在として若者達の中にはいり込む。次の引用は、老人と若者の代表でもある彼の縁者 Roth との違いを淨彫りにさせるものといえよう。

「ただたまたま連中が見張っているから人間はまともな振舞いをするにすぎん」(.....“it’s only because folks happen to be watching him that a man behaves at all.....” [244]) という Roth に対して Ike 老人は、「そんなことをわしは承伏するわけにはいかんぞ」…「わしは決して—」(“I deny that,”.....“I dont” [245]) といふ、人間の善意を信じる、人間の偉大さと尊厳を信頼する彼のモラルを説いている。そして更に、

“There are good men everywhere, at all times. Most men are. Some are just unlucky, because most men are a little better than their circumstances give them a chance to be. And I’ve known some that even the circumstances couldn’t stop.” [244]

と、その信念を披瀝している。

しかしこれらの格調高い言葉も結局はまやかしであることが露呈する。彼は Roth の子供を抱いて Roth に会いに Delta にやってきたこれも Tennie's Jim の孫であり、彼の縁者でもある octoroon に General Compson が彼に与えていた角笛を縁者のしるしとして彼女の子供に託し、次のような冷酷な言葉を告げる以外に何もなすすべもない。

“That's right. Go back North. Marry: a man in your own race. That's the only salvation for you.....for a while yet, maybe a long while yet. We will have to wait. Marry a black man.....” [257]

これに対してこの黒人女の律律しさはいや優る。彼女は Roth の子供を腕に抱きながらも Roth に結婚を迫ったり泣事を言うために彼に会いに来たのではない。北部へ行くための最後の別れを言うために来たのである。しかるに Roth は手切金ともいうべきものを自分で渡す勇気もなく、Ike 老人に依頼する卑怯者でもあるのである。彼がこの女と一緒に暮っていた六週間の間、彼の口から出ていた名誉とか掟とかいうものが結局は自分に都合のよい虚言に過ぎなかったことも彼女は指摘する。

“.....I knew that to begin with, long before honour I imagine he called it told him the time had come to tell me in so many words what his code I suppose he would call it would forbid him for ever to do.....” [254]

Roth は、彼女によれば Ike が Roth の祖父にあたる McCaslin Edmonds にたゞで譲った土地のために「まだ一人前の男でもなく、そしてその責任は Ike にある」(He's not a man yet. You spoiled him” [255])と言う。Roth はそのため甘やかされて、この“Delta Autumn”の最後では今では殺してはならない牡鹿まで射ち殺す、掟を持たぬ若者である。作者はその牡鹿と Roth の彼女とを掛詞にして Roth のモラルを問うているのであろう。芸術的なその手法は見事である。

この“Delta Autumn”の中で Ike 老人は Sam が昔、Ike が12才の時始めて牡鹿を仕止めた時、彼のナイフでその鹿の血の印をつけた時のこ

とを回想する場面がある。12才の少年 Ike は「おいらはおまえを殺した。おいらはお前の飛び去っていく生命を辱めめるような振舞をしてはならない。今から永久においらの振舞はお前の死にふさわしいものにならないといけない、といった謙虚さ、そしてまた誇り高い気持で立っていた」(.....while he stood trying not to tremble “humbly” and “with pride” too though the boy of twelve had been unable to phrase it then: *I slew you: my bearing must not sham your quitting life. My conduct for ever onward must become your death* [248]) [引用符筆者] のである。しかし今80才の老人 Ike の状況はどうであろうか。彼は今でも昔と殆んど変らないすぐれた射手ではあるが、そのために「何頭の鹿が彼の鉄砲の前で倒れたかさえもはや彼にはわからない程」(he no longer even knew how many deer had fallen before his gun [237]) の鹿を殺したし、この事は彼が依然として Boon があれ程狂気のように叫んで護ろうとした「りす」を無残にも数知れず殺戮し、その南部貴族の特権階級の『鷹狩り』から、黒人の悩みの中に入っていけなかったことを如実に物語っている。先程から繰かえしてきたこの *pride* の意味も、鹿を殺し、鹿を征服した騎りの外の何物でもないのではないだろうか。Ike が Old Ben 退治で示そうともがいた — 敢て「示した」とは言わない — *pride* と勇氣は、連綿として荒野の消滅への追打ちとなってこの日まで続いてきたのである。Roth の相手の黒人女が、Roth や、又 Ike にも示した憤怒と軽蔑の言葉や表情は、不毛に終わった Ike のイニシエーションの終焉を物語るものであろう。「わしが昔知っておった、今は破壊されてしまった森が、報復を求めて叫びをあげないのも、なんの不思議はないて！それを破壊した人間どもが、自分で森の報復を仕上げるまでのことじゃ」(No wonder the ruined woods I used to know don't cry for retribution!.....The people who have destroyed it will accomplish its revenge. [258]) という言葉は、Ike や Roth がみづから崩壊していく運命にあることを意味するのではあるまいか。そして Faulkner は自身 Ike の自己形成の方法にも反省すべき問題を残していることを正直に

認めているものと思われる。そういう意味でこの『熊』が、‘ambiguity’をもつことも止むを得なかったと、いえるかも知れない。言葉をかえて言へば、Faulkner は「問題解決」への第一歩を踏み出したものゝ、その壁の大きさにいさゝか戸惑い、たじろぎ、そしてそのことを正直に自己批判することの中で、作品そのものゝには曖昧さをたゞよわせる結果となったのである。(本論は1976年1月31日、中四国アメリカ文学会1月例会において発表したものを修正加筆したものである)